

＜東アジアにおける長崎と平和学＞

研究年度 令和6 年度

研究期間 令和6 年度～ 令和8 年度

研究代表者名 山本 裕

共同研究者名 河又 貴洋、尹 清洙

はじめに

研究の目的は、平和学の立場からナガサキの立ち位置を批判的に検証することで、東亜大学（韓国・釜山）で開催された東アジア学術フォーラムで中間発表的な報告を行った。フォーラムや懇親会では、韓国、中国の研究者との意見交換も行えた。東アジアの安全保障や基地問題では日本と似た状況にある韓国で、予定では市民の意見を聴衆し、有識者にヒアリングも試みるとしたが、今回の研究では日韓の学生の交流の場を利用し、韓国の学生の意見に耳を傾けた。さらに、シーボルト校で国際政治学者の藤原帰一先生を特別講演会に招聘し、一般にも公開した。

研究内容

3 人の平和学の認識を深めるため、研究計画の参考文献を中心に文献研究を個別に進めた。また、被団協がノーベル平和賞を受賞したこともあり、平和学とナガサキ、ヒロシマは例年以上にメディアでも多く取り上げられ、認識を深める一助となった。さらに、分担者の尹は哲学的なアプローチから平和学を説くことも試みた。その結果河又と尹は発表と論文を、山本は発表を行った。

研究成果

研究成果は前述の通り、以下の発表と論文がある。

＜河又＞

「アジア太平洋地域の平和と情報地政学」を『国際研究評論』に投稿。内容は、「21 世紀はアジアの世紀である」というパラグ・カンナ（Khanna, P., 2016 年、2019 年、2021 年）が示すように、接続性と機動性が高まる中で、グローバル・バリューチェーンの中核をなすサプライチェーンでアジア諸国が連携してきたにもかかわらず、米中の技術覇権争いの中で分断を余儀なくされている。論文では、米国と中国との技術的覇権をめぐる争いを、国際政治経済学的アプローチを用いて、アジア太平洋地域における情報通信技術の産業生態学的・地政学的経済学的なパワー構造問題としての国家間の平和的パワーバランスの在り様を分析・考察した。関連発表を釜山で行った。

＜尹＞

「東アジアにおける平和の経済的帰結～九州最西端の国境離島五島市の産業構造の視点から～」を『国際研究評論』に投稿した。内容は、国際平和論において重要な役割を果たしているカント（1795）の永久平和のための確定条項の中身について理論的に検討した後、長崎県五島市の産業連関データを用いて五島市の経済構造の特徴を明らかにし、東アジアにおける平和の経済的帰結について実証的に検討した。関連発表を釜山で行った。

＜山本＞

被爆県であるナガサキで学ぶ意義と被爆県でありながら米軍基地を抱える矛盾や不条理を、同様に米軍基地が点在する韓国で、フォーラムに参加されている韓中の先生方に呼びかけた。

おわりに

ノーベル平和賞の受賞とも重なり、平和学を大きなテーマとして、ナガサキ・ヒロシマを何度も振り返った一年であった。発表や論文で一定の成果を得ることはできた。そのような中で、核廃絶の行動や発信、平和教育に関してはすでに多くの蓄積があるため、我々の研究としては、ナガサキを重層的に理解するためには、それ以外の視点も必要になることを感じた。幸いにして、長崎県には世界遺産に登録された一連の隠れキリシタンの遺構や教会群、徴用工問題の一端ともなっている旧産炭地などもあり、ダークツーリズムの視点には事欠かない。次年度研究の示唆が得られたと考える。